



近世悦美少年録  
八編  
三

~ 13  
3567  
38



門 13  
號 3567  
卷 38

新局玉石童子訓卷之二十三

東都 曲亭主人授編次



第五十三回

李彦胤忠東西不履歷を  
範的奸惡擬二郎と寛を

登時韓錦の間貫佐用二郎の松煙齋と向谷の語次不他の已が亡父親佐  
用六故世の故朋輩を多と茲ふてゆき知り疑の露の雲を思ふ  
膝と找めり先生何とらるや貴老の我先大人  
歳より比二親の夜話不然者ありと傳へける肥後の菊地家の一忠臣防守筑四  
郎李彦胤忠の故まる果むあらざるやと訝り問はる然れども我身和殿の父大人  
と俱小舊里不世と潜る其比和殿弟兄の尚幼小なり今に迷ふ面忘れ  
ねば知る知るよりも一旦怨と結びよ和睦の今料らるも言の茲不及は是

早稲田 大學 図書館  
昭 34.6.3 庚  
藏 書

舊縁の盡き所素懐と遂る不似されども故世王世不在は故りや  
 人切ての心遣り我年来の宿念と和殿小告まき思へども憚りの閑壁の耳  
 あらうとと佐用二郎少あき其美るる配慮の要る我一家児る弟佐七  
 作と女弟の角鯢の弟子奈我四時八々今尚南偏あるげれども他等も都腹心  
 る。洩れとそものけしうあはれいとくと請回へ松煙齋の丸四郎四下と見交る聲と  
 低めて然らば意衷と盡と一と言くと少ぬく在昔南朝の殘燼るけは我  
 舊君菊池肥後太郎武俊朝臣武勇々父祖小弥増たる孤忠義烈のまろ  
 のく興復の夙望已時る肥後の阿蘇山の敗城小義旗と揚あひか當時足  
 利家より討隊の頭人防長豊玖數洲の守大内左京權大夫義貞王數萬  
 騎小將とくちうら向ふと少えや。躬方素より小勢を對外援の兵るけれ敵の  
 猛威小恥怯しく落も者ものまろける然ばいそあれ武俊主の勝負と未然小

量りし。一箇の躬方と敷せしと右一夜風雨の暗に紛れて主卒と共小  
 城と棄て任方も知らざるのへ寄隊へも濡さして全勝の利を認め不似と  
 こと然れはとささる功るけれ義貞怒と移ま小け人の諫と聴きしと彼阿蘇沼の  
 蛇虎と燔て然る凱陣あけける此是永正六年己巳の春二月のゆふ多て二十  
 餘年の昔ふるぬそれよりとせのく乱れて京師へ戦馬小荒るまも東西の海風  
 波濤に國民安らざる開が中武俊君の夫人をとりまける小芳宜の方とゆえ  
 まで阿蘇の山里小澄せまると給事ある者ハ我丸四郎季彦夫婦と和殿の  
 二親只是の俱小馬と飼薪を樵或ハ潮と汲と貝と拾ひて辛は得世と不樂あ  
 り小芳宜の方小仕まると武俊主の御任方を悄悄地小索まられと生死得世と  
 知るよりもある。只真愛るける光陰のまると早く十稔と麻糸ける永正十五年の秋の  
 時候和殿の父大人故世更有一日咱参ふ譚さるる屬日人の噂小はるる

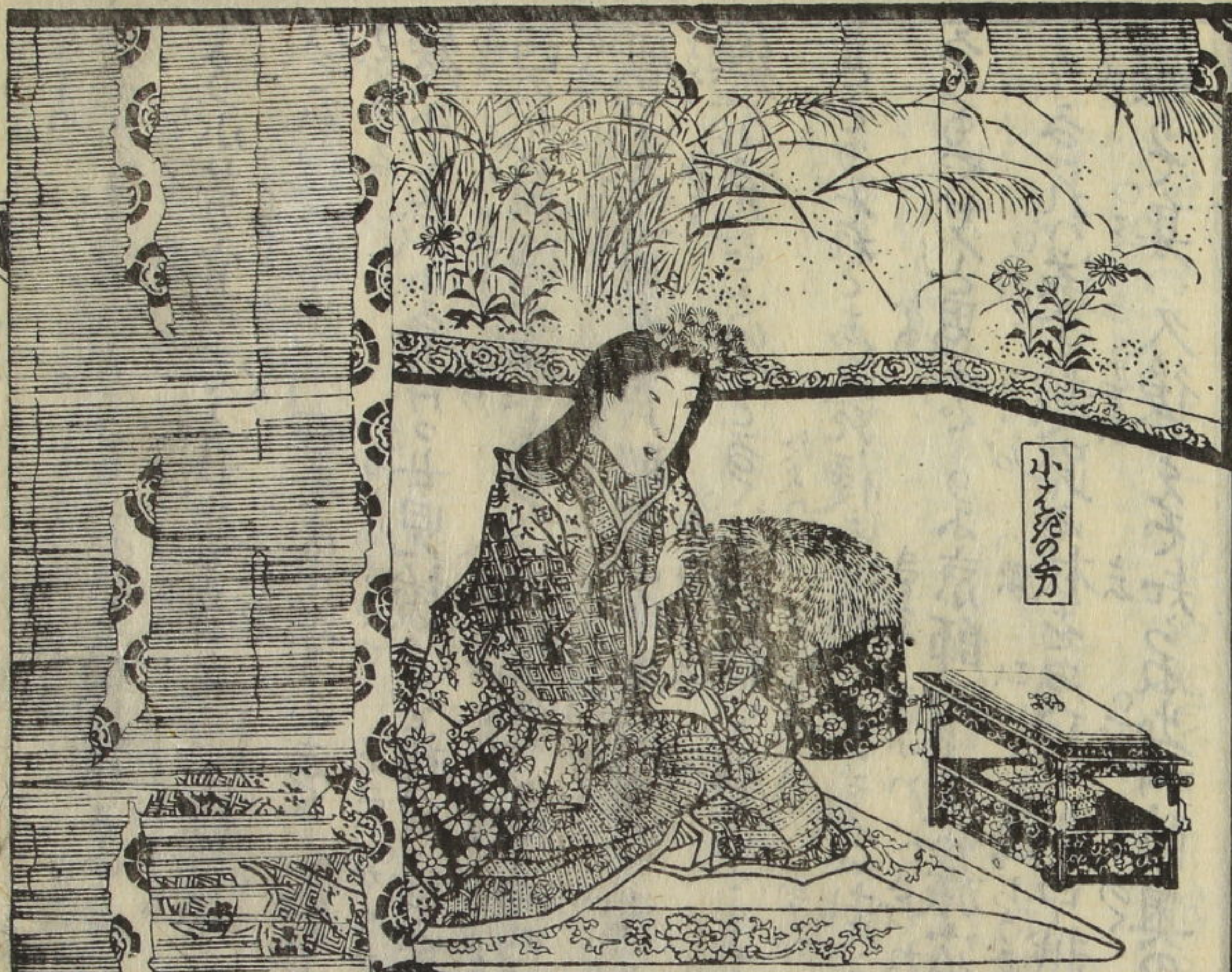
太郎武俊君の阿蘇山落城の初より東國の方へ世を避めて近曾身故  
 てのひともやえ或は猶存命てどうもまきといふ。虚實詳るる後どの信里あり  
 額どうち合で徒物と思ひより。咱ち宅眷と推して京浪速のゆゑの心を  
 巡歴して我君の御所在と素なすらばやと思ひ然れれば和殿夫婦のまを小若官の  
 方へ給事まを衣食其餘の東西まをも調達まをらるゝといふ。大まきまをけむる光  
 陰小関守あるまをければ壯年の今思ひたて。氣力と俱に脚腰を衰ゆる老後小  
 至る千里の逆路と欲まともいふあて克せんや。まのまを何と思ひあふと問れて已  
 答るまを。住るも忠義の外。和殿は遠くまの地と去て彼山所在と素糸なる  
 自ら夫婦の留りて夫人の仕へまをえあて。如く便宜ならぬ但老少不定。命の  
 長短料りがらう。一たび袂と分りまを。送る本意と迷むと後れ先なる露露命の  
 他郷小終るとまを。兒子まを幼仙。親の契り。其人を知らまを。知られまを。せむ

作者曰下  
 源高葉  
 集松浦佐  
 用媛云の  
 古歌の  
 公孫樹局  
 編の用  
 ぬの時上五  
 文字の  
 筑志四五  
 とま実の足  
 暗記の太  
 今ま古歌  
 と後まの及  
 びて因る  
 改正ま香  
 官足を思  
 乙狐か

忠心義膽埋れて子孫の世に知らるべし。俱に紀を貽さん故と云ふ故世王感  
 佩して其まを是小介る。紀の跡に優まを者。和殿の素より能書へ何れ一  
 筆貽しと乞れて辭へまをあらね。躬て其意小任る。短冊一枚まを出ると墨  
 摺流し筆と添て。遠く入松浦佐用媛都麻恋小領巾麻毛り。まの負へ山は名  
 と萬葉集ふる古歌と写し。その短冊と函箇小裁て上の方と佐用六使小授け  
 下の方と我懐小斂めて且のり。今まの後年と麻正ても再會の時とまを。今  
 日の契りを兒孫小告はて各まの短冊半分と授けて當時の照据小させ和殿  
 の家子佐用二腋子の稍東西と知る童蒙へ况我獨まをる。校をへ統小五歳まを  
 てぬ憑心からぬ者まをれ。幸ひ小して共侶小本性尚古の志あふ。後の禰益小まをるも  
 やせんといふ佐用六使諾感とて然らば亦所望あり。我家子佐用二郎と和殿の令  
 愛拔る童女と目今親の心りて結髪の夫婦小做さる。年久く逢ふまをる。

親の契りを忘れむと。送所所在と尋索りて。後竟小妹と夫の縁と結ぶと。や  
 ありきの多誰何と談せらる。是は是とちて頭と掉りて合る。開も由る。わね  
 ども我思ふ多い。介らむ男女。送小稚は。結髪衣の夫婦と。富貴舊家。よよそ  
 あはれ和殿と我。日花の。花の。見子も。一所不任る。今婚姻と定ると。生涯  
 環會もあは。俱小徒。節義と守りて。娶らむ。嫁らむ。ある。縦年。環  
 會日ありと。その。約莫。男。女。の。情。縁。の。稚。時。と。同。ト。か。む。送。小。成。人。る。あ。及。び。て。  
 外。小。増。計。仕。あ。る。不。至。る。俱。小。厭。く。思。ふ。ト。然。る。時。の。親。も。然。る。其。害。あ。り。其。  
 利。を。是。小。因。て。これ。と。思。へ。婚。姻。の。の。議。ま。く。む。と。い。ふ。小。佐。用。六。叟。再。議。小。及。  
 び。づ。の。の。趣。皆。理。あり。然。ら。び。自。然。不。任。せ。と。密。談。既。小。果。一。か。當。晚。佐。用。  
 六。叟。の。夫。婦。小。芳。宜。の。方。の。御。前。小。あ。り。て。主。君。の。御。所。在。と。未。系。ま。く。欲。え。ぬ。る。  
 臆。念。と。告。稟。し。て。身。の。暇。と。乞。ま。る。か。小。芳。宜。の。方。へ。禁。め。る。と。餘。波。と。惜

まきあふ。是。時。ま。も。猶。些。の。御。貯。禄。あ。り。れ。ば。則。餞。別。ふ。と。黄。白。錢。枚  
 欵。賜。り。つ。彼。身。の。暇。を。合。ら。せ。あ。び。佐。用。六。叟。の。拜。謝。と。逆。路。の。准。備。も。密  
 密。小。其。年。の。八。月。下。旬。小。宅。春。と。送。り。携。て。東。を。投。て。立。去。り。ける。是。よ。りの。後  
 彼。君。小。仕。へ。あ。る。者。と。の。我。們。夫。婦。の。ま。れ。ば。艱。苦。八。入。小。弥。増。て。心。細。く。も。あ。り。程  
 小。芳。宜。の。方。の。年。來。の。御。煩。襟。蘊。り。と。や。あ。る。次。の。年。は。春。の。時。候。より。長。病。病。所。小  
 臥。の。て。鍼。灸。藥。餌。の。驗。も。竟。小。神。去。り。あ。い。か。我。們。夫。婦。の。哀。悼。悲。泣。の。亦  
 多。う。も。あ。ら。む。か。却。あ。る。あ。ら。む。が。御。亡。骸。の。潛。や。う。程。遠。く。ぬ。山。院。に。埋。葬。さ。る。  
 ま。も。世。の。憚。の。言。れ。れ。只。の。御。墓。表。の。望。夫。石。の。三。言。を。勒。と。菩提。と。吊。ひ。な。る。  
 程。小。幸。る。と。の。ま。ち。續。て。我。妻。音。矢。の。年。の。冬。時。病。の。瘡。聚。身。小。迫。り。て。  
 黄。る。泉。小。歸。り。か。命。難。面。に。我。身。の。春。の。雁。の。對。と。喪。孤。孫。の。枝。小。離。  
 ま。異。ら。む。松。の。標。も。甲。斐。る。死。ま。小。只。吳。竹。の。世。と。不。樂。て。慰。る。者。と。の。稚。は



小太郎の方

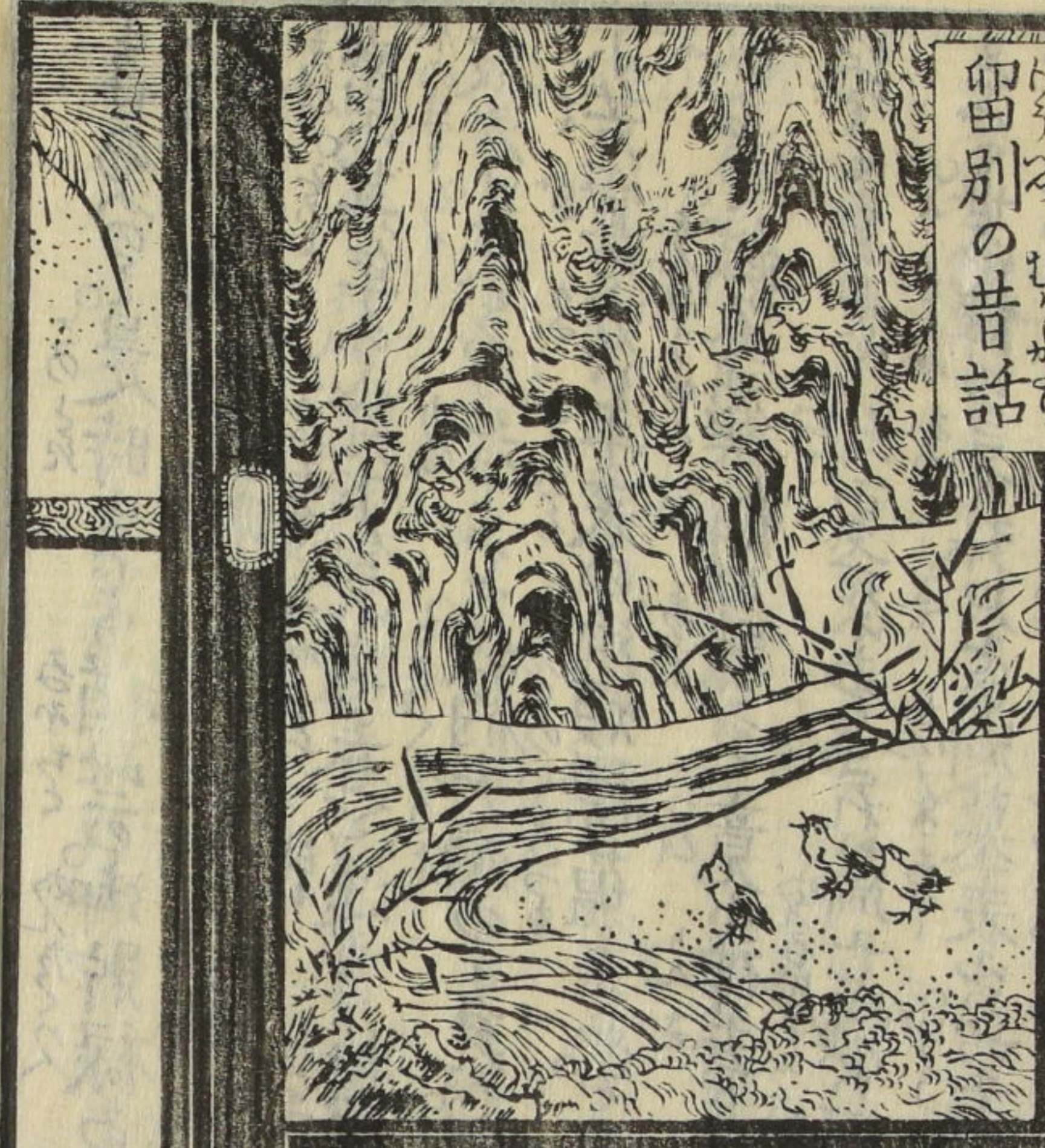


孫四郎

おとや

おたけ

五



舊夫人小謁  
して防守  
間貫東西  
留別の昔話



佐用六妻



佐用三郎

佐用六

五石立子記巻三

大徳寺

女見のまゐるれば左さま右さま思惟る今仕る君もろく茲ぞ艱苦を凌ん  
 たり。小方宜の方と我妻音矢の小祥忌を果し我も回貫佐用六の志小效  
 ひて我君の御所在を索巡る小あくとあらどと竟小深念を定めかゝる當年  
 終小七歳ふるりける女見抜小と推乃て啓約ある時佐用六更と六路を日先  
 西の九固園を送もる。徧歴ある南海四園小杖と曳小日と重年と思ふこと  
 厭り。這里小二月那里小半年。我書と需る人の為小逗留とそ潤筆を盤  
 纏小元ととととと。二四稔と歴ゆるまで欲する所我君の御所在と涉獵  
 とも。それとある便る所更小東小赴て佐用六更小環も會り商量敵小  
 ろもやせんと思ふと小京師浪速小旅宿者も他も亦何處小在るや知る  
 するれば遂小越路小杖を曳て越中越後小へらう。加賀能登佐渡會推  
 渡りて身の久後のを知らぬ羽陸奥の盡處までも漏を隈る長旅受

四五稔と歴ゆる程小女見抜小八年闋て既小二八ふる隨小教されどと縫  
 刺の技草書目も抄るる書讀むと久好も然逗留の程人小借り源氏  
 宇津保竹採るえ假字文章小もあらと然り本性るる第一  
 親小孝順も容止も亦醜もねも里毎小取女らまく欲するもありか我小  
 親小美引元或の亦逆路も護麻の灰人肉脛紀も呼做されて他郷より來ぬ  
 る婦女子と勾引ゆる盗見あれと守るもの勤小ある然らも西騎旅の鳥見  
 のある小姥捨山の月るる只抜小の慰めらむそ去歳より信濃の山里小在り  
 今茲の上毛武藏より常陸下總安房上總まで尚我君の御隱宅と素はすら  
 まく思ひ。二月の時候小那里と去りて料らも白猪の驛路と過るその日小  
 時病發りて逗留程和殿の為小抜も媒妁せられより送小然と結び果  
 和睦の今に至り俱小素生と解諦甘豈憶念和殿は是昔契り我故

明輩同貫佐用六故世更の家子佐用二であらふ其三親の世ふまを我本意を  
 多小似えと親小優を兄弟兄の名告逢一の尚馮心もあく歎ひふて七とい過業  
 の長談脩話韓錦の佐用二郎胸と誤り且蓋て顔の汗と拭いぬる被然る  
 頭と拾は。嗟嘆堪堪と谷る中思ひたや防守先生貴老の忠義の我亡父十倍志  
 た。憂苦艱難今もゆかす我身と送置殺せられん抑我親佐用六故世を  
 昔年肥後と辭去りて京小一稔浪速小一稔僑居て舊君の所在と未承りし  
 毫も便とぬらう然らば東園赴人を猶亦宅眷と推しての地小來り料  
 安小故の領主部領の郡領武彦主の肥後の菊池と同族にて數世の遠祖の時東  
 西小別せられ世の人は是を知者稀然れ菊池武俊主の昔永正六年の春の  
 時候阿蘇山の城没落の後一二の近習と從ての地小潜びてのまよ小時運竟小  
 至らざりてそれより繞小三稔の後永正八年の夏の時候那身時疫小犯さして命

穴まぐらうのひく。西首の近習ハ胸腹研て同枕小伏したけ。然當時由縁の  
 者あり彼主従の亡骸と這百緒の驛盡處る。阿甦禪院小密山寺ナリ。南忠  
 主僕之墓と六言と鐫做して其墓表小あり。其墳墓今も猶彼禪院の  
 後の山小あり先生古て見ぬ。紛れぬづもあらざり。是より後十稔と廢て我  
 二親の兒子とせ。の地小旅宿とつらも憶り多く彼秘事とぞ知ることも  
 けま。其御先途小逢らうと悔恨めども見納り。切々舊君終焉のの地小  
 杖と駐りてを兒子と為小我生涯の謀と做さけれを。則茲小居宅とトて  
 武藝と人小教ふる。身の生活小まてける。今戰國の習俗と異。總角牛打ッ  
 立里も武藝と嗜むる者あるとるけれ。の業大く必と富小あらねと貧くも  
 あり世の倒不安る。たと思ふも似。我父這地小杖と任り。五稔とい春三首の  
 時候嗜む酒小身と損れて吐血と世と去り。既小其終小臨て我佐用二郎と



枕方招たるる送言の條々異肥後在り一時同僚をける防守氏と共  
 侶の武俊主の夫人なる小芳宜の方小仕へたり。その事之首より。その地小末つ尾  
 まで絶えんとする自の下の其崖畧と説示し。且父の我身之地小住者し其  
 比より。其舊里阿蘇山なる防守筑四郎小消息し。舊君太郎武俊主の  
 之地小早逝去ぬゆゑと云をる。彼上の実説を詳小告げやと思ひ。其地小住者し其  
 いふせえ肥後の舊里其路二百十數里の山と海と隔絶せ況乱世の不自由なる  
 脚力郵書易の便着る。非如鴻便ありとも世中人も憚りぬ。一大事なる我  
 秘書と人信あり遣り。汝のありて。財用餘りあり。目もあら。故郷へ  
 赴きて彼方さると訪まると。防守夫婦小我宿念と云云と告ぐ。遮莫汝  
 の親小携られて阿蘇の山里と云り。比へ尚髣髴せあり。然年閑て防守  
 叟小名古逢まゝとぬるとも。既小送小面言して疑るるも。あら其再會の照

据西の我身袂と分り。筑四郎が言し古歌の短冊あり。其短冊と函箇  
 載する半分の我方小蔵りて。今尚茲あり。是と汝小渡を。護身書裏の  
 秘措と異日用の達よ。其半分の筑四郎が必や秘蔵するらんか。正  
 ちた付契るけれ。再會の折是と取也。他小見せさる疑へざる。其の餘り  
 云云と貴老の令愛拔る童女と我を。為小結髪の約束せま欲る。貴  
 老の敢美引を理りを演て推辭ゆ。その言の顛末を。霜の朝小鳴く虫  
 もも。細まる聲と勵して。告示を者半响許其甲夜の回小呼吸絶む。我  
 身の不幸は是の。母親も亦る次の年。癩て不瘡の背小出。病とい  
 ち。久か。航て空しく。四月八日と忌日を。二親共小阿甦寺を。舊  
 君の墳墓の頭を。我身小肖小あるも。是より。後志と將。親の  
 箕裘と承嗣て。武事力藝と。人の師小做り。敢家聲と。賤き。俠と磨る

氣と使を。後れを攪らトとの思ひ。只是血氣の惑ひる。先彼符契を見  
 せまらんと。肌膚囊と檢撈りて。彼短冊の半分と合ふと引伸し程不  
 親の身。還側せ。後をい。重く。項の拭。護身囊の括。用  
 その短冊の半分と合ふ。袂と掖。親の遞與。季彦を。受と。膝を  
 找めて。此彼両首の。短冊。合せ。見も。見ら。稀代の。付契。佐用。二郎。藏  
 々の。其短冊の上。方。遠。人。松浦。領中。麿り。も。二。仍。讀。れ。松。煙。齋。の。防  
 守。四。郎。季。彦。山。名。其。短冊。下。方。佐。用。媛。都。志。小。負。山。名。亦  
 是。二。行。不。讀。れ。是。を。合。吟。亮。遠。人。松。浦。佐。用。媛。都。志。小。負。山。名。亦  
 より。負。山。名。と。連。續。名。歌。高。調。を。写。も。能。書。也。同。筆。同。紙。の  
 疑。ひ。り。は。韓。錦。の。佐。用。二。郎。又。縦。小。見。横。小。見。奇。多。と。駭。嘆。外。小  
 詞。の。り。る。當。下。防。守。季。彦。の。短。冊。を。故。の。如。く。分。て。斂。め。ま。を。愀。然。と

貌と改め。佐用。二郎。向。ひ。適。韓。錦。和。殿。の。孝。義。虚。一。か。ね。と。相。別。れ  
 より。十。二。年。親。の。貽。一。符。契。の。短。冊。料。相。合。り。何。と。人。を。美  
 む。似。れ。と。大。凡。人。の。命。運。の。遲。速。の。厚。薄。の。和。殿。の。養。故。世。世。主。君。と。宗  
 孫。の。え。と。小。芳。宜。の。方。小。辭。稟。多。宅。眷。と。送。り。推。て。故。御。を。去。り。草。枕。旅。不  
 在。る。と。久。か。ら。料。ら。も。の。地。不。來。昔。君。太。郎。武。俊。王。の。世。在。り。と。撈。り。と。撈。り  
 其。墳。墓。見。る。と。是。を。時。運。の。速。不。あ。り。又。又。見。子。二。名。の。兩。首  
 則。男。兒。親。の。家。業。と。継。足。れ。其。心。節。も。推。て。知。る。我。身。他。と。同。ト。初  
 故。御。在。り。時。小。芳。宜。の。方。小。仕。ま。り。忠。信。節。義。の。甲。斐。る。と。彼。君。御。命。長  
 くら。世。ま。り。て。幾。程。も。我。妻。音。矢。も。逝。死。り。か。ら。黄。泉。の。客。ふ。る。ぬ。跡。不。送  
 る。幼。少。也。這。個。の。女。子。抜。る。の。外。小。次。資。る。男。兒。を。形。る。身。の。遣。る。方。わ。く  
 いら。主。君。の。御。隱。宅。と。宗。孫。の。ら。ば。と。思。ひ。當。日。絶。不。七。歲。ふ。り。昔。見。抜。る。と

携りて萬里の逆路に赴けりよ。今に至りて八九年夏憂甚艱難の公を以て是年  
 今月這地に於主君の既世ふる人々の數も入りぬ。只人傳ふ所の思ひ  
 りの更餅に作りて父女法師のるりぬ。是命運の流るるを初我和殿を  
 別る時再會の符契に代てその短冊に写したる萬葉集の彼古歌の回貫佐用六とい  
 防守筑四といの迭の姓名も寓れるの深は意味あるをりたり。今中思へば以  
 るふ似たる何とるべ小芳宜の方の御憂死に在昔松浦佐用媛が良人大伴扱  
 彦と恋慕のあまろ領巾垂りて死して石に作りたる古俗の口碑に伯仲志し  
 然ればや彼御墓表に望夫石の二言と勸をの自然不似る況臣季彦等  
 艱しと稚に女兒と逆路に伴ふ辛苦の折々故妻恋しと思はぬ時を女見扱  
 るが孝順る母と慕ふて泣けり稀に比皆是逝てかへぬ船の跡を覓て腸  
 断なるる追慕慕哀今昔人情同一致る抑亦奇なるまやと過去來と

諄復を親の歎に小扱る之慰難て鼻をちかされ心も俱に首春近に入相の鐘  
 鏗々たる點燭時候ふるりけり當下韓錦の佐用二郎の松煙齋季彦の述  
 懐とぞく回ふのく恥て拾難る頭を奉ていける忠る哉防守先生貴  
 老のゆひ終始錯る苦中の苦と喫く其志程らるる和漢古昔の精忠  
 義烈彼賢哲も恥ざる是ふ就て朽惜くいひぬる我親に我身彼子  
 とく亡父の非と云々と論ぶるあらねども今公道をのていぬ其行以正か  
 ら是是を貴老に比れ雲と壤との差別あり甚益我父佐用六も舊里に在り  
 時主君の夫人小芳宜の方とあり捨て見えらるる余後這地に旅宿して舊君述  
 去の實説とぞくとも殉死もせむ追腹斫る彼兩國の近臣及びが切て  
 頭を剃圓めて彼御菩提を吊ふ然る志あるを是より家々營て見  
 孫相續長久の計に暇るる一為忠薄義とのいふ當時我身の童年也

親の由来と備不知らね、諫言りしと憾とを非如今親の爲ふ其非と飾と説講  
 るとも人を欺く欺く、寧ろ天を欺くべからむ。後の世は是を知る者あり、筆を載て  
 必論は悲しむ哉。我身の親も及ぶ忠も孝も、前の日亡父の友、避  
 逅あきらみ出處来歴実名假名と問も訂さるゝと威勢ある人の爲ふ其覺と  
 妾小と媒妁あると聴れねば怒り飽き出り、慢侮の罪、和睦の今、千言萬  
 語とので勸解るとも、鄙語の尻放て後死と合ふ異らぬ、我身の臭氣を  
 思ひ、恥と知らざる者とのまん知らぬ以前はとも、今に至りて、防守主其身の孤  
 忠少、其孝順言詳し、知る上の我身の罪こそ最重、縦先生佛意をのて  
 我罪戾を饒ゆるも、我何等の面目ありて世の中人も交参、死是より、子  
 等の疎を従ふ者ある、只胡慮お做らぬと已るべく、とらぬ、傍小措ける長中  
 刀を合ふるも、金く引抜死て、肚と研き、あてれば、季彦敬馬に推禁せ、とら

何ぞを狂乱ある、欲先を及ぶ放り、と詞急迫、諫れ、抜も俱小、敬馬に  
 ろから、父の後方小引添ふ、然ればとも、佐用二郎の止るべくもあられ、思ひ、切る聲  
 震ひ、防守主禁めある、今我自殺の親の爲ふ不忠の罪、贖ふべく、我僻事の  
 遣方る、身と潔くせんと思へ、其首退む、と敦圍、猛威止るべくもあられ、  
 と、バ次の間小竊聞ある、奈良櫻の佐之七と押繪も、俱小胸と洗し、と燭を  
 乗り、走り、走らぬ、と、左右より、捕着、抱縮め、及ぶ奪取、と、これとも、佐  
 用二郎の毫も、撓まざる、八重作、禁る、押繪も、要る、怪我、と、左と脚と  
 掙し、と、寄ると、突退、揮拂ふ、必死の覚、期八重作、押繪、力足らざる、あわれ  
 とも、左右、と、刃を、奪難、と、只、争ふ、鎮め、あむ、せ、術、と、見、と、不、け、  
 前卷二十二、第五十二回、の編、左小、早く、介程、大江、杜四郎、成勝、峯張、六郎、通能、の、御、向、  
 田文の茂林、遠く、地藏堂、詣ん、と、一路、人、多、鷺、松、煙、齋、父、女、と、主人、樵、二郎

ら去む一霎時別を。彼佛堂へ赴らる。拜を其頭と看匝る。黄昏近くる。隨ふ  
 いそいで俱かへり來て。韓錦の庭門より杖を入らむ。あるより。主人韓錦の佐用二郎を  
 松煙齋の防守筑四郎と暗譚最細や。来て。送小説り。説示さる。彼舊里の  
 夏小芳宜の方の。又短冊の付契の。菊池武俊の病死の。又佐用二郎の  
 父同貫佐用六の。流天曲直逸四郎季彦夫婦の。孤忠義胆の事の顛末都  
 づののの。最中。その。驚かえん。俱小柴の離色の。陰  
 立在て。言の果ると。俟程。彼條々と。嘆賞感激。不堪む。  
 猶开。儘。あ。主人韓錦の佐用二郎の義理。迫り。先非小着。て。自殺せん  
 と。狂ひ。と。松煙齋の。八重作。押繪。禁れ。も。止る。も。あら。れ。大江王  
 僕。の。難。て。立。頭。れ。母。屋。入。の。諫。制。る。而。聲。烈。く。韓錦。王。狂。ひ。る。せ。我。們。方  
 僅。の。來。て。憶。も。彼。秘。事。と。洩。す。て。感。心。の。外。あ。ら。ず。と。議。さ。る。と。あ。れ。

みづろ血氣の勇と負と匹夫匹婦の情。瀆れ。溢る。小。傲。ら。る。秋。と。あ。れ。て。散。馬  
 佐用二郎の憶。巻。と。緩。め。ぬ。通。能。透。さ。衝。と。寄。て。双。を。奪。ふ。八。重。作。の  
 遞。與。其。押。繪。の。鞋。を。拾。ふ。敵。め。く。开。儘。推。乃。て。走。る。奥。へ。退。り。け。る。然。れ。時。ハ  
 奈。我。四。郎。の。這。時。も。も。出。後。れ。て。次。の。間。お。潜。と。居。り。送。小。叫。び。領。り。て。裳。と。端。折。兩  
 袖。寒。け。て。冬。鯉。の。像。く。突。然。と。走。出。り。聲。高。や。う。大。事。と。知。る。大。江。峯。張。覺。悟。と。せ  
 よ。と。叫。び。も。果。む。左。右。一。齊。組。ん。と。競。ふ。と。成。勝。と。通。能。の。敬。馬。は。さ。る。言。も。喋。か。む  
 俱。小。身。と。及。一。空。と。敷。ま。し。脚。を。飛。と。撲。地。と。蹴。る。修。練。一。對。白。打。の。精。妙。時。ハ  
 と。奈。我。四。郎。の。吐。嗟。と。一。聲。叫。び。も。あ。ま。身。を。轉。し。て。簷。廊。へ。仰。反。休。れ。平。張。け。ら  
 當。下。主。僕。の。位。と。睨。へ。噫。疎。忽。之。而。箇。の。力。士。を。我。們。料。ら。彼。密。話。と。洩。す  
 く。と。も。交。遊。の。差。我。小。北。月。利。小。惑。ふ。豈。告。訴。者。ら。ん。や。人。を。知。ら。ず。鳥  
 詩。人。か。る。と。兩。聲。高。く。響。れ。佐。用。二。郎。と。八。重。作。の。果。れ。て。笑。ひ。忍。び。時。ハ。あ。ら

叱懲して。為主僕不勸解。成勝と通能の合咲る。坐と占て。あつた。居  
 ちの安堵。今の擬勢の戯る。と。久間。時八。奈我。四郎。の身。と。起。下。頭。を  
 敲。て。疎。忽。の。罪。を。勸。解。け。り。是。時。既。小。日。の。暮。り。八。重。作。の。時。八。重。作。と。立。上。り  
 夜。の。儲。と。見。て。俱。不。庖。厨。退。る。程。不。押。繪。の。燈。引。提。ま。て。四。下。を。照。し。且。主。僕。の  
 無。異。の。勢。ひ。と。舒。る。も。成。勝。と。通。能。も。押。繪。等。と。方。を。更。不。推。二。郎。の。向。ひ。く  
 り。や。韓。錦。主。和。殿。の。一。美。の。我。們。明。日。を。預。る。べ。退。り。て。休。息。ま。あ。ら。せ。や。と。い  
 う。と。佐。用。二。郎。羞。る。色。あり。膝。組。直。し。と。答。る。や。在。下。自。殺。と。欲。あ。る。實。小。短  
 慮。小。似。れ。ども。防。守。叟。の。孤。忠。と。せ。て。親。の。為。身。の。為。小。の。解。免。詞。を。然。れ  
 ども。自。殺。を。允。され。む。の。年。來。の。俠。を。捨。て。桑。門。の。入。ら。ぬ。と。い。ふ。と。彼。君。既。不。世。と  
 禁。め。て。も。亦。血。氣。の。感。ひ。を。和。郎。の。舊。君。武。俊。不。仕。一。小。あ。ら。せ。彼。君。既。不。世。と  
 去。り。ぬ。孰。か。為。あ。る。忠。義。を。盡。さ。ん。只。世。と。共。不。推。移。り。て。身。を。保。つ。を。と。考。と。ら

い。の。の。美。を。思。ひ。ぬ。り。と。説。れ。佐。用。二。郎。沈。吟。と。點。頭。を。答。る。や。諸。君。の  
 意。見。感。服。せ。り。然。る。亦。情。願。あり。我。乳。母。の。佐。用。二。郎。の。父。佐。用。六。の。俗。稱。と。取。り  
 置。く。を。あ。ら。む。む。ら。ん。れ。も。古。昔。日。の。松。浦。佐。用。媛。と。良。人。大。伴。挾。子。彦。が。新。羅  
 征。伐。の。將。軍。と。て。水。路。を。彼。國。へ。赴。く。や。佐。用。媛。痛。く。亦。莫。少。て。死。す。と。あ。ら。ぬ  
 貞。女。之。文。字。を。異。る。れ。唯。父。子。も。庶。字。の。即。間。貫。也。佐。用。六。佐。用。二。と。喚。做。せ。る  
 忠。も。る。貞。も。る。然。る。と。彼。名。小。摸。擬。せ。ん。恥。と。知。ら。る。者。不。似。ら。る。故。小。氏。を  
 棄。て。猶。然。も。も。韓。錦。縦。二。郎。と。い。れ。ん。と。後。安。く。あ。ら。べ。れ。我。弟。八。重。作。も。の。意。亦  
 倣。て。間。貫。佐。之。七。の。昔。名。と。告。る。と。只。奈。良。櫻。八。重。作。と。喚。れ。ん。と。相。心。か  
 ら。ぬ。の。其。甚。麼。と。談。ま。れ。の。衆。皆。好。と。稱。を。る。开。が。中。小。成。勝。へ。は。つ。や。屢。點。頭。て  
 以。わ。る。哉。主。人。の。用心。在。昔。孔子。の。盜。泉。と。飲。ま。ず。曾。子。の。勝。母。の。里。へ。入。ら。ぬ。と。い。ふ。故。事。を。表  
 裏。中。で。恥。て。貞。女。の。姓。名。を。避。る。の。新。奇。と。い。ふ。下。是。小。就。は。も。防。守。叟。賢。老。ヨ。マ

ねん 甘んぢう ぎたん の ころん せん せん せん せん  
 年の精忠義胆和漢の先哲時彦と云ふもよく及ぶ者稀るべし只昔君の  
 見参の素懐空しく多しのと外にやうく痛く送憾のさそかか慰められ  
 免四郎拔も俱小法然と坐小涙暗たるわらう八重作時八奈我四の縁運ふ  
 夕饌と佐用二椗二郎見うて現鈍する免不紛れて夕飯遅滞小及びか  
 ぬ物欲くくまらるる疎菜もれもうち甘んで食るゝ押給も出と給侍を  
 甘んぢと小衆皆相謝して儲の饌小就く程小椗二郎の二重時と辭して  
 奥へを退りける有右夕饌果一椗四箇の客の時八重小案内せらるる送代小  
 浴室へ入りて浴き程小既小初更の過ぬ一昨宵の寝不睡を主客の疲  
 勞一入るれば押給の奈我四郎も小指揮して為小臥簟と儲一椗各枕小就  
 ぬける其詰朝免四郎季彦の早飯を果すと馳て單阿甦寺小詣る  
 昔君菊地武俊の墳墓小拜謁して香華と賻けて廻向の程思ひいふと

厚復 懐舊の涙小堪ぢ 這日當寺の住持を訪ふ即如く對面せらる  
 當寺の先住の素是肥後の人氏そ在俗の日菊池生小昔縁あり  
 武俊阿蘇山を没落の後あつ寺小小居あけるも是是の由縁あれは  
 然れば現住閑廂和尚即先住の徒少して尚古の老實入るりけし季彦  
 彦一話と交へしと送小捨がたあるあり是より後も季彦の父母の地小邊  
 留の程日毎小阿甦寺へ詣るを彼身の務小あきらむる間話休題韓錦椗  
 二郎の季彦拔るるもと相迎へて宿所小留めし次の日此の酒肉と調理して  
 大江主僕共侶酒盃を遣迎していよく交遊の義を固うせま思ふ程小韓  
 錦の弟子の早く被顛末と傳ふて故人环客逗留の歎いと表まると東西を  
 贈物を言かりける丹が中が僻めて韓錦が彼少女と取せりしとてその壽  
 祝を致さ者さありし椗二郎も笑ひてそを傳ふの錯誤る我の夫と娶

してあらむ。その壽祝の要るゝと推辭て敢受されども猶生憎不賀まは  
 者日毎小間断あるとみれば憶おも日と費しく四月も下旬ふりける當下韓  
 錦樅二郎の軍肚裏小思ひを曩中我諺て郡司殿小憑れて彼少と妻小  
 媒妁せま欲ふふ。その成るべくもあらば怒小棄して出宗たる彼條の崖  
 畧の殿も夢知りてはまるる。然るに因怨地と見て和睦あるのそを彼  
 父女と我家小留め在らまる今に至りてその故よりと云云と殿小告稟まは  
 我身必然心らま。只明ら地小稟まふと。是守思とあり八重作押給  
 多大江峯張おも意衷と示きて事の利害と向ける。孰と異議まは  
 者もかく然るべしと心か樅二郎ある決して次の日の早旦あり。梳髪と衣  
 裳と整て當郡の領主より。鏑野郡司範的の館小軍赴死て隨即拜見を  
 乞ける。侯と約半响許遂小喚入れて對面せらる。是時範的の左右ゆる

最苛め。兩箇の近習樅二郎と虎目小け。只是者のほりたる然るに韓  
 錦樅二郎の範的の小見参して寒暖と舒無異と祝て彼一を告まきまらふ  
 範的の言果ると侯と。勃然と聲震立て樅二郎近く杖と縁。汝憑と甲  
 斐る。侯者我日屬より汝も。懐刀子と思へ。曩中の最とひ。これ  
 あり。うち中して彼媒妁と木女。然れども汝が力とてその事成らむ。口を  
 介るを何と。彼少女と情地小宿所小引入れて。娶りて相愛する。言語同断  
 とひ。其の風聞隠れる。我れ知り。今さら何の面目あり。詰  
 来く虎威と犯さ。取るよ。も。檻松見る。た。樅二郎阿容  
 た。色る。頭と拾けて。合る。開。御説。小可何等の故と。彼  
 少女と取。知る。者の推量と。然る風。做。彼父女の  
 着。實。箇。様。々。初樅二郎。怒。棄。彼。父。女。を。逐。時。彼。第。



又人小跟らまき。行李も盤纏も喪いと立合阪小露宿の。その崖界成  
 演説して且の争う。その比彼父女を憐ふ者あり。小可と非分とて。實解て程膝を  
 執結さる不及びて。彼等が素生と回考る小思の。けり彼の少女の親へ我父佐用  
 六の故友也。昔故郷不在り。時莫逆無二の。も知られ又彼少女の稚き時結  
 髪の良い人あり。相別しより往方と知らねば。その所在と素んと。廻困ある者あり。  
 有敷素小うちも措かざる。姑且我家小止宿と許して。盤纏を取らせてその投ま  
 方小半遣らまき思ひの。彼等が脚意小從る。艱苦と小厭なる。素小よ  
 正彼少女子小結髪の良い人あり。その髪を禀し上んと。推参仕りひいたといひ  
 せも果ては軌的の。呵々と冷笑と。口と横裂衣らると。以てくわいりあなる。非除  
 子貢の辯舌とて。火を水小ひひ做まとも。孰うそれを實言とせ。公達たは  
 るるら。虚實と正まねるも。始といふ我の亦面止くも。るたといふれば。這回枉て

鏡もせん。以後と信と慎とねと。の件の面箇の近習の共侶小顔と衝て。今  
 なるぬ。寛仁の大度他が頭を續れらる。御恩いと執合され軌的の。然  
 もあをあらめと領れら。樅二郎小うち向ひて。やれ韓錦は。知らざる。彼  
 我股肱也。鬼刺苛三扇。鉢持隈八刺高と喚做して。武執助力一人  
 當千俱小一方の旗頭小做まとも。要ある者ら。扇谷殿。朝。小傭れて。年  
 来河踰の城在り。昨今其役果。俱小かり来て。又咱等。扈從を。上。相  
 識小なりねか。と。苛三隈八。其方小膝と推向て。豫。韓錦和郎  
 再生の御恩報。小。一。樹。我。小。教。と。誇。る。と。軌。的。う。ち。切。て。開。一。段。興  
 わる。一の頁の日のいと長なる。と。空。や。銷。ま。れ。我。等。一。覽。せ。ま。く。欲。と。  
 とくと促せとも。樅二郎小從ら。荒介と笑々答る。脚。誼。兼。り。ひ。も。脚。誼。兼。り。  
 時の御舎也。弱はも強は勝とあり。怨と結ぶ媒るれ。脚敵の。望。下。から。



三石堂主人

七

文藝堂藏

三五



力其藝と著しく  
韓錦酷く苛三  
隈八を懲ま

三石堂主人

文藝堂藏

二八

況所挾這御坐席也。敷劍角觥不便。猶又折也。今日允其命。他日  
 とも果む。軌的の眼を睜り聲苛立ち。とら鄙怯之和郎。其似は命。他日  
 両箇に見賤く敵も不足らむと思ふ。欲最鳥辭之と怨む。縦二郎辭まほふ  
 ようなく。あらん。是非及む。何れ付られ。とら苛三。うらやま。坐席の試  
 撃の種々あり。遮莫腕推枕曳。小兒の戲。似たるべし。只坐角力こそあまげ。是  
 とら不限八も。找と出。鬼薊且。終我。們的の両箇也。韓錦の身。單。然。まほふ  
 とて他一箇。二人。蒐り。勝ても恥。年齢。後。鬼薊。和殿。探。一。探。受。咱  
 等の。初。司。と。仕。ん。あ。の。委。其。其。麻。と。啓。ま。れ。軌。的。の。笑。々。ら。ち。笑。く。隈。八。言。宣。不  
 理。あり。と。わ。く。せ。ま。や。と。い。そ。ぐ。く。軀。て。席。を。改。ま。り。苛。三。と。縦。二。郎。の。程。上。處。退  
 る。送。小。袖。を。褰。身。と。構。へ。膝。と。合。と。組。ま。く。ま。當。下。鐵。持。隈。八。の。扇。成  
 颯。と。推。啓。れ。の。身。を。斜。小。隻。膝。立。く。間。を。隔。る。角。觥。の。作法。一。霎。時。呼

吸と覗く。やと曳く扇と共侶。苛三の皮より蒐りて。蚤く利を捉り。ま  
 く。と。縦。二。郎。の。毫。も。透。さ。を。振。拂。ひ。遣。違。と。推。の。推。れ。り。疲。勞。と。俟。ひ。苛。三。の。吐  
 糾。ま。る。像。く。眼。眩。と。術。を。ひ。る。と。縦。二。郎。の。程。を。と。ひ。れ。と。猿。臂。を。伸。し。頂。上  
 抗。て。弱。腰。礮。と。撲。惱。ま。力。の。剽。捷。暴。後。視。の。毬。と。弄。ぶ。小。異。る。ら。む。苛。三。の。吐  
 嗟。と。む。ら。二。間。の。ま。り。投。蜚。され。彼。身。の。庭。の。卷。原。額。と。拓。し。血。と。流。し。て。死。活。も。知  
 ら。む。小。ま。り。六。俱。の。驚。く。鐵。持。隈。八。見。る。小。沼。堪。む。韓。錦。と。敷。き。ん。と。喘。る。身。と。托。ま  
 時。取。る。も。蚤。く。腰。刀。と。抜。ま。く。ま。縦。二。郎。の。居。る。腕。を。拵。し。七。臂。と。禁。め。て。又。と  
 抜。せ。ま。怯。む。と。向。腔。拂。て。仆。る。所。を。突。飛。せ。何。の。一。霎。時。も。瀕。死。隈。八。も  
 亦。庭。面。身。を。放。下。され。苛。三。の。仆。ま。り。上。伏。累。り。て。起。る。の。遣。ら。ま。春。蟲。け。り。然。る。程。は  
 範。的。の。今。這。吉。の。光。景。小。舌。と。吐。直。と。呆。れ。て。面。板。や。く。小。醉。る。が。像。く。只。憤。恨。胸。の  
 盈。て。の。い。づ。も。あ。ら。ま。り。と。縦。二。郎。の。も。あ。そ。と。思。ふ。あ。ら。ま。り。と。色。中。出。さ。ま。社。擡。合。と

恭しく輕的のりまのうらむむら御所望ごしょぼう実まこと黙止もくしかきこ酷ひげん無禮ぶらいを仕つかぬぬ既すで御用ごようの果  
 たれたれ身の暇いとまをゆるゆるべべ異日見参仕いじつけんさんしらぬらぬと告別いさよひ多身たみを起おこして後門うしろんを投な退  
 出でけりけり是時このとき郡司ぐんじが家いえの若黨わかしやう小厮こわし幾名いくにん彼居角觥かゐかくかうの勝負しょうぶを見みんとと次の  
 間ま小こうち集合つどい障子しょうじの唾つと穴あなと穿うがりり観のぞく者もの三さん思おもふふ似にどど奥  
 醒さめるる呆惑あまねまををありあり怒いかり今いま樅ぼん二に郎らうがが出でてて見みるとといいともとも送おくりりもも甚おそろ他たがが在あららるる  
 去時このとき衆しゆ皆みな慌忙わうまうたた々々齊いっしょ一庭いつていの走下そうげ々々仆ふきき苛い三隈八さんくまいはちをを扶起たすけるる勸すすめ  
 肩かた引被ひくく出でけりけり是これをを鏑野かぶら範のり的てき韓錦かんきん樅ぼん二に郎らうのの怨うらみをを累かさねねてて遣やるる方  
 ももるるややありありけんけん後のち竟ついに小こ奸計けんけいををりり彼身かのみをを辜つらら陥おとしめめるる是これ其その吉きち支しの原はらなり  
 けりけり畢竟いよいよ苛い三隈八さんくまいはちがが韓錦かんきんのの投懲なげささまま後のちのの話説わがごと甚おそろ麼まををやや开ひらきき又  
 卷まきをを更あらためめくく且かつ下くだ回まわ解分げぶん法ぽうをを聴き録ろくかか。

新局玉石童子訓卷之二十三終



